第　９　号

浮金小だより

発行：令和元年１１月２５日（月）　　文責：浮金小学校長　松﨑　健一

本格的な冬がやってきました。真っ白に霜が降りる朝が多くなりました。でも子どもたちは元気に活き活きと活動しています。ボランティア委員会は、朝の活動として校庭の草むしりや石拾いなどをしてきましたが、落ち葉が目立つようになってからは、落ち葉掃きをしています。寒いのですが、大きな竹箒を手にニコニコしながら活動しています。やはり『子どもは風の子・・・』ですね。

地域に出て学習しています！

２年生は生活科の学習で習ったことをもとに、もっと知りたい場所を選んで探検してきました。

ジスケファミリーショップ訪問では、値札付けやレジなどの体験もさせていただきました。

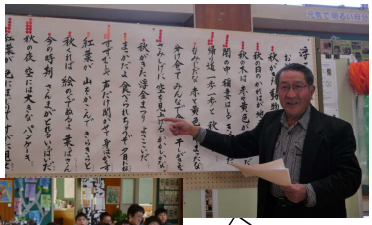
月叟寺訪問では、浮金の歴史について知ることができました。昔の浮金の様子が描かれた地図には驚いたようです。

古川工務店訪問では、どんな仕事をしているのか説明していただいた後に、機械を使って高さや長さを測ったり、バックホーなどのたくさんの重機を近くで見たりなどの体験をさせていただきました。

帰りの会での良かったことの発表で、ある子がこのように言ってました。「浮金のいろいろなところを見学したけど、みんな質問に詳しく答えてくれて親切にしてくれました。浮金の人は優しい人ばかりだと思いました。」

お忙しい中、子どもたちのために丁寧に対応していただき心から感謝申し上げます。

言葉を紡ぐ　浮っ子句会２０１９



浮金句会の佐藤さんを講師にお招きし、２日間に渡って句会を開きました。今年は全校生が参加です。

子どもが考えた句を全員分模造紙に書き出し多目的ホールに張り出しました。そこから気に入った句を一人３句選びます。たくさんの人に選んでもらった子もいれば、一人だけに選んでもらった句もあります。読み味わい方は人それぞれです。身近な自然や生活を見つめ、俳句を学ぶだけではなく、『みんな違ってみんないい』を学ぶ機会でもあったように思います。多くの子の共感が得られた句を紹介します。

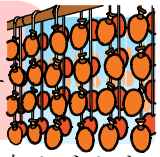
子どもの表現は、素直だからこそ読んでいて楽しいです。すばらしい。

【下学年】

さくらだな　年に一度の　おくりもの
赤とんぼ　羽つかまえて　またにがす
サンタさん　ぼくがほしいの　わかるかな

【高学年】

秋の夜　空には大きな　パンケーキ
帰り道　一歩一歩と　秋の暮れ
スズムシや　声だけ聞かせて　身はかくす
紅葉が　色はじまりて　すがた見せ



小野中学校体験入学

６年生が小野中学校へ行ってきました。４月から共に学び生活する町内の小学６年生全員が参加しました。教育目標、授業の様子、委員会活動、部活動など中学校の雰囲気を一人一人感じとって来たようです。学校生活についての説明は中学生が行いましたが、その姿にあこがれを感じている場面も見られました。部活動見学では、他の小学校の子と、どの部にするか話し合う姿も見られました。中学校入学まで４ヶ月あまりの時間ですが、希望を胸に抱くとともに小学校生活をより充実させることに力を発揮して欲しいと思います。『元気で明るい自分たちの浮金小学校を創る』です。頑張りましょう。

個別懇談を実施しました

お子さんのよりよい成長を目指して、保護者の皆様と学級担任が話し合う大切な時間でした。ご都合を付けていただきありがとうございました。ご心配な点があった方は、話し合うことで少しは解消されたことと思います。今後とも、気になる点があれば学校までご相談いただきたいと思います。

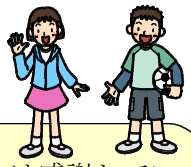
こんな電話をいただき、嬉しくなりました。

１１月１９日の朝の時間でした。教頭先生が電話に出ると、
「そちらの学校に通う子どものことでお話があります。」
電話をくださった方は、郡山にお住まいで実家が小野町の方でした。
「朝、並んで登校している先頭の子どものことです。」
その方は、次のように続けて話をされました。

朝、母親を乗せて郡山方面に向かうときのことですが、集団登校の先頭の５・６年生ぐらいの子どもが、車道にあった大きな自動車の部品のようなものを、わざわざ列を止めて待つように指示して、自分だけで拾いに行っていました。自動車がよけて走るような大きな部品だったですが片付けてくれたんです。その場面を見る前に、前を走る自動車からタバコをポイ捨てする様子を見ていて、非常識なことをする大人の行為に気分が悪くなる思いだったのですが、その子の姿を見てとても嬉しくなりました。

その方は、その子どものことをしきりに褒めてくださったそうです。教頭先生は、時間を割いてまでご連絡くださったこと、子どもを褒めてくださったことに感謝して電話を切ったそうです。

すぐに、５・６年教室に行き、「今朝、道路の大きな部品片付けたかい？」とある子に確認すると、「はい、片付けました。」と当たり前の顔で答えます。「気づき、考え、実行する」６年生の頼もしい姿に、私も嬉しくなりました。



校長室より

私の長い小学校教員生活の中で、高学年を受け持つことがほとんどでしたが、１年生を担任したことが２回あります。まだ若かりし頃で２回とも各学年３クラスある大きな学校に勤めていたときでした。

１回目は教師３年目のときに突然でした。４月１日､出勤するやいなや校長室に呼び出されると、そこには学年主任クラスの先生がずらりと座っていました。私は事前に３学年担任をお願いすると言われていましたが、校長先生から「１年生担任をやってくれないか。」と言うのです。驚くと同時にすごい緊張感が襲ってきました。すぐに返事が欲しいと言わんばかりの視線がいくつも私に注がれているのです。どうしようと困惑する私に、校長先生が「どうだ。」とぽつり。私はとっさにこう答えました。「１年生担任ということに何の不満もありません。ただ不安が大きいだけです。」と。今思えば、校長先生も相当困っていたんだろうと思います。何とか引き受けてもらえればというお考えだったのでしょう。

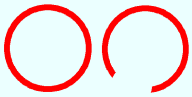
２回目は３校目の学校でした。異動していきなり６年生を受け持ちました。しかも３クラスとも男の先生です。なかなか元気な子どもたちでしたが、無事に卒業させることができました。そして今度は５・６年生と２年間受けもって卒業させたいなと思っていたのですが、なんと１年生の担任をお願いされました。２回目でしたので大きな不安はありませんでしたし、やりがいを感じていました。驚いたのは次の年度、また６年生の担任になったということです。６→１→６と学年も端ですが、教室移動も端から端への移動で、大変だったのを覚えています。

今思うと、とても貴重な経験をいい時期にさせていただいたと、当時の校長先生には感謝しています。というのは、振り返ると児童理解をいかにすべきかを学んだのが低学年を担任したときがきっかけだったと思うのです。１回目は、不安で一杯でしたが、ベテランの先生方にいろいろとアドバイスをいただきながら、低学年児童とはどんなものかを少しは理解できたと思いました。２回目のときは､私には産まれて３ヶ月になる娘がおり、子育てが始まったばかりでした。夜泣きをして大変なこともありましたが、日ごとにできることが増え成長していく娘を見て、いちいち感動していました。すると、１年生の小さな成長のすごさに気付けるようになった気がしました。翌年にまた６年生の担任になったときも、これまでとは違った６年生の見方をする自分がいました。「こんなに成長したんだ」と、本当に思えるようになってきた自分を感じたんです。

人は、できないところや欠けているところばかりを見てしまいがちです。でも、それでは人を理解することはできないと思うのです。できているところもできていないところも、まるっと見取ろうという大きな気持ちがないと、その人を理解することは難しいと思うのです。

子どもたちは、今日も寒さに負けず元気に登校してきました。子どもをまるっと見取り、『元気で明るい自分たちの浮金小学校を創る』ことができるよう、子どもたちと向き合います。それが私たちの仕事であり、楽しみでもあるのです。

さて、突然ですが、次の図でどこが気になりますか？



全校朝の会で話したことです。お子さんに聞いてみてください。